

亀山 亮さん

『AFRIKA WAR JOURNAL』(リトルモア)

絵本の衝撃を出発に



マイマイ兵士たち(コンゴ民主共和国2006年)
© Ryo Kameyama (以下写真作品すべて)

第32回土門拳賞を受賞した亀山亮さんの『AFRIKA WAR JOURNAL』は、2003年から2010年にわたり、サブサハラの紛争地帯で生きる人々を撮影した120点の写真と撮影の詳細を書き下ろした文章を収めた写真集。隻眼の写真家が見つめたものは何か。そして、写真家を目指した原点の記憶とは。写真ライターの桐谷麗了子さんと語り合う。

ポートレート撮影：會田 園

幼少期と戦争・写真

桐谷 戦場カメラマンになろうと思ったのはいつ頃ですか。

亀山 僕の場合はスタートが早いです。この前、小学校の時の先生に会ったら、僕が卒業文集に「戦争を撮るカメラマンになりたい」と書いていたと言われました。でも、戦争に興味を持ち始めたのはもっと前で、小学校低学年の頃です。早乙女勝元さんの絵本『東京大空襲』（絵：おのざわさんいち）や中沢啓治さんの漫画『はだしのゲン』などを読んで衝撃を受けました。特に『東京大空襲』の絵

は、一面に真っ赤な火が描かれていて、そのなかで人が燃えている様子が忘れられません。桐谷 その衝撃が写真につながっていったんですね。

亀山 エディ・アダムスという戦場カメラマンの『サイゴンでの処刑』という写真と、その現場の映像を見たことが実写に興味をもったきっかけです。ベトナムの兵士を路上で射殺して処刑する士官が写っていました。何の躊躇もなく、タバコを吸うように撃ち殺す姿がショックでした。アダムスのものに限らず、ベトナム戦争の写真には強い力を感じて、自分もこういう写真を撮りたいと思うようになってきました。

桐谷 初めてカメラを手にした時のことは覚えていますか。

亀山 高校生の頃です。ただ写真を撮りたいという欲求と、若さの勢いで前に突き進んでいる

感覚でした。

桐谷 まずカメラを向けたのは、国内の社会問題でした。たとえば、成田空港の建設で立ち退きを要求された三里塚の



きりたに・りょうこ ●1979年 神奈川県生まれ。『アサヒカメラ』『美術手帖』などに寄稿する。

農民たちをテーマにしています。亀山 当時は社会経験がなく頭でっかちでした。いい写真を撮りたいと思っていたけれど、それ以前の問題ですよ。自分で働いているわけでもなく、生活の苦しさを知らない子供でした。皆と一緒に農作業をして、活動家たちと話したりしながら写真だけではなくいろいろなことを学びました。僕は真剣だったけど、大人たちから見たら可愛いものだったのでは、と今も思います。

メキシコ／パレスチナへ

桐谷 自分の目で戦争を確かめ

ようと、二十歳で初めて海を渡ってメキシコの紛争地域に行っています。昼間は働き、夜間で写真学校に通ってお金をためたんです。 「仕方がないとわかっていても成田空港を利用するのはうしろめたかった」(写真集収録テキストより) (写真に亀山さんの繊細さを感じます。あまり勇ましい印象ではありませんね。そして、現場でも打ちのめされてきてしまう)。

亀山 これまでメキシコ、コロンビア、パレスチナ、アフリカ、どこに行ってもニュースで得ていた情報と現場で感じることに大きな差に愕然としました。



かめやま・りょう ●1976年 千葉県生まれ。96年より世界の紛争地の撮影を始める。